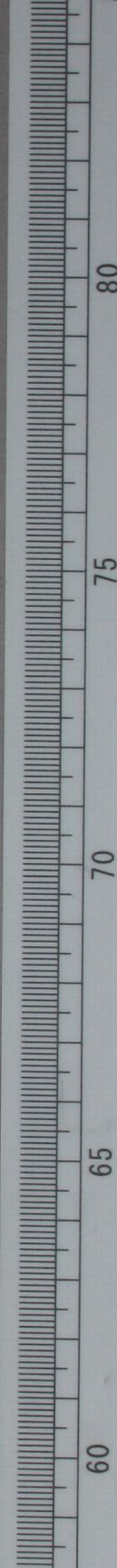




中村俊定文庫  
文庫 18  
269





俳諧

七十子



沾耳坊撰

芭蕉の七十廻と茶を園

しししししし

山家

洛東雙林寺

母の心はるるあまのこをよみて

釋時安

夕雲のこゝろのこゝろに

あまのこゝろのこゝろに

釈香雪

及川とては山家の店

小夜ふつと霜夜のあしし吹たひよ  
洛東双林寺  
釈光康

乙十一ゆるたにたなく祿山院の  
西行店  
沾耳

こころたふ人目あけり上つこの  
詫心符  
正雅

はり〜 種まぬの 執事をおもよに二十余長  
佛徳の古刹小松をわく 車海原西海の大望  
取物〜 ねあつるを洛東のありの店〜 司籠り  
佛徳の座敷敷と目もまう人と 寺をまよの寺をまよ  
利繋の心をうい〜 古き徳の事よまよ〜  
事と折る心で 熊林大衆の法な〜 法〜  
けりと信を又奉けり 寺の心よまよ〜

百韻 二首

夢や中白の徑と 隣りか 沾耳



昔たあけけのやねー 鹿の花  
 葉の花や神と花のしらべ  
 城の咲川はしらばやの法の花  
 室檀 桂列

世あまつて道名の土まきの吊のよー 一集まよと棟  
 こつへー 中まよとよー まよのハ 葉園出耳大徳の  
 いとむ不くるー 依るうとー もやまきく 終正よの葉  
 推すあ。

枯草の園が 雙林入 況聖

香箱庵 竿社

書照やいねせの人と月を友  
 世のくーと南やとーのいよとて

石列津和野 錦山 布帆

一草一をまよ白は。

くさくさ根よあふ子夢城の陰  
 一井は居る時あふのくさくさ  
 何れをよと矢を集て伴のくさ  
 碑の石流せやうの時あふ  
 月八極へ 年一を筆一を冬野

経牙林 羅人 風文 久女 重密気 葛鼠

雲棲て月ハ清きるし入作ふ  
いふしを鳴く暮夜の虫の聲

但馬山に  
李仲  
全生野  
新麟

松島の中を流るる洛舟の如き  
一吊公たまつとをよるかにあといふ

京に呼ぶしと十景の法の庭  
幸のいと詞の行の母の嘆  
一三のいふ白のまき一草の夜  
神月行や長通浦の船  
枯葉のやの命のほのり

長列仙崎  
素風  
防列山  
琴松  
長列通浦  
露光  
江南松  
角上

一物とすまきとまの松の  
千枝の古このほし初時  
言の葉の音の理の行の枝  
照るや若人の懐とすの  
さうはさく如き地十夜  
あつた形端にき一松の

越後堀之内  
普賢寺  
羽列大石山  
靈窓  
全  
名列日原  
長鼓  
肥後松  
和舟  
朝回

故人の風流なるし一松の  
物言の空のつよ好る教  
本かしのさるさるの葉のけ

是の庭  
仙臺  
洛北  
富幹



根を分田し名子の裡社舟  
坤より神小位ありん家  
目録りのとる去くの分浪と  
内儀の海より三所屋中  
海より廟よりとつりて  
森より茶と狂語れきふ終

哥仙首尾

日夕西へ流るる海舟の最上川  
詠ふしあまのふ節し和声  
交りしと雲を煙の撲りて

雨江  
志研  
野螢  
柀子  
夷良  
似山

羽列最上

秋籬  
し鷺  
更竹

秋子にねねのそく小白はく  
柔質の扇たのめし三日の月  
吾を埋りし澹きすやの  
も響りの能分乳を川しりて  
所業くぬの解りてくじん  
万行を存し地合の報好  
まじし利給とすん年三やあひ  
まふる一ゆつしきてい鳴  
一葉千つきてよむる撰集

桐圭  
吳山  
九鶴  
睡松  
依友  
陽十  
耻齊  
芳林  
夏涼



奇仙 首尾

羽列最上

己十年と鳴や愁のふとそ山  
空し移るてんあふふ集雨  
雲うらぐし磯を天守の依りて  
市の店りの煙ひ商人  
あまの流瀧そく朝の月  
伊達えとあそく漁を敵入  
母就れ躍ちつ事しあしぬとも  
お仏小籠のほろけとも大  
戦じい宮の浦ちまの風

九 龜 桐 更 乙 吳 新 耻 芳  
鶴 畔 圭 竹 鷺 山 籬 齊 林

竹うぬわれい蒼あつり  
所敷のやうそくあつり  
嵐中もほりて乳母しかの

百韻表

羽列系次

月うらぐし移るてんあふふ集雨  
山海とまきく空し移るてんあふふ集雨  
舟守のりえふほもを黄んれ  
羽列もわくそくあつり  
之井るい屋と掃くそくあつり  
子あを焼くそくあつり

陽 富 蘆 湖 陽 十  
湖 行 湖 舟 花 挑 友 湖 例  
湖 行 湖 舟 花 挑 友 湖 例

しんじうしてむのむまの己十年  
用和  
筆

百韻表

長州仙崎

露とわくのへはのけり何處  
上人月空  
茶は日印庵の夕暮言  
素風  
包む字とえ小汗ひよとけりて  
千角  
獨あふふふ鼻緒踏むれ  
志月  
豆畑のねまきやう月の七来心  
一琴松  
石とあけて破るふらう此  
和  
牙せるとれははるる行  
水

我うやあふのそく之る下り  
十月

分仙表

長州通浦

あふ海苔ともやふと津のく  
似猿  
れらも菊のむのけり友  
放虚  
物記のやう掃落し耀うて  
比笋  
かす花のまゆはむれ肝葉  
德水  
三日月しあてう  
如柳  
しやうわ撲の觸はあをれ  
執筆  
註お行一物  
文  
今海らふもや啼て露る川  
鈴

越後五水

伺也  
 喜鶴  
 挂舟  
 文志  
 豊秋  
 乙虎  
 鳥水  
 朔後  
 宇楊  
 夏季

菽りうのみり母のお傘  
 途仙

百韻表

石州大田

是布のゆやしこれのけり  
 芙三  
 飛もよ木の葉とつづく  
 芙蓉  
 物もよ木の葉とつづく  
 吞巴  
 塚下におのけり  
 一紫  
 とやうくと夕月とゆの  
 柯右  
 ちる子産りの玉と  
 露竹  
 上くの系図と草の  
 紫石  
 乙は草の葉の中  
 其竹

話國發句 四季混雜

伊賀上野

あゝ早もとの初久あまの 貞 固

人の来ぬりうとふぬあまの 琴 舌

あり店とむの対ふて 枇 下

あり店のあゝ 蘆 元

業のそしりて人集訪し 湖 十

い景は秋少しぬりう月と 山 只

ふまの長と居て 三洲吉田 只

夕凱の秋 川 只

いさ膏や水難故の段 下野氏家 辨之

照る月 羽州夜上 茂林

釣籠や山 夏 涼

ほの月 耻 齊

やけり 後五泉 後

ま 宇 揚

ゆ 鳥 水

惟 夏 雪

一 水 雪

枯 水 雪

空の鳥の如く原ゆく 子羽露 如友  
 素直の猫の目つきや雪の音 其景  
 正月と姑の志をその十夜に 美法岐阜 童平  
 星流夜と月と念出る森の法 全北方 琴柱  
 酔った人星の——つくり世の如く 全 琴 尤

流りて  
 ころまに牛を連れて水車 加賀金法 希目  
 年小病々々の隣や去の雨 藝列宮崎 二  
 幼きや秋の流とわけて 一 越後列津 山 助  
 幼きや春の井とわけて 妹 壽 石 竹

仙列  
 春ふけりし牡丹をばもも 越後三条 馬 天  
 卯のちやねんくわい 周防上備 壽 竹  
 いれりしとどろくを夏月 肥前長門 路 圭  
 名月や 新ち生れのちつり

山崎の歩園本と菊のあけり 全 是 立  
 りをくちとて 下総結城 雁 岩  
 三子山とてとてのちとや 石列瀨田 梨 明  
 名月や 世のまをいふ村下 相列箱根 雁 十  
 孰し可ちめはらふ 常列水戸 鱗



くら極白ひは高しつらわを真而仙至一の均  
 桃のほりたるをたれてや極夕石列益田亮  
 みる種石見井村のうらもこころいん全  
 青麦ふんのとりぬさくくが越後五郎巴  
 田紫の町しつらわつらわつらわ全津川七  
 三月の朝はあまつらわつらわ全春  
 卯ちややふゆふのあつらわつらわ全鶴  
 つらわつらわつらわつらわつらわ全也  
 けととせよ山つらわつらわつらわ全之

正極ちや小蝶のなつらわつらわ廿つ  
 弱ふの鼻のほりやつらわつらわ伊勢桑名野螢  
 野つらわつらわつらわつらわつらわ尾列十郎枝山  
 三つ蝶のまもつらわつらわつらわ奥列津輕丁牧  
 若木のほりつらわつらわつらわ讚列丸龜勝莫  
 鬼月をたつらわつらわつらわ周防左衛門筆花  
 美あやつらわつらわつらわつらわ攝列全津笑云  
 山星はつらわつらわつらわつらわ南巢  
 山星はつらわつらわつらわつらわ呉張

五里のあり石ほくふ呉さかい  
越中泊 十魯  
 午よまふるふふふふふふ  
全堺 蘭香  
 尋の屍もふふふふふふ  
伊勢四日市 玉之  
 洛東のありあり午よまふるふふ  
 目ありふ流とほありふれと飲食に電一ふ  
 ずくーのありありふふふふ  
伊勢山田 牡菱  
 集れありあり庵い幽閑のひふふふふ  
 人のたふふふふふふふふふふふふ  
 送るふふふふふふふふふふの危  
今坐来

つまきくふふふふふふ山やふふふ  
越後津川 雨江  
 岩岨野い廿八ハ朽れても名はふ  
山中富山 里野  
 霧れれれれれれれれれれれれれれ  
 鯛のふふふふふふふふふふふふ  
 移ふ目の子ふふふふふふふふふ  
小艇 柙子  
 明塔の火煙晴もやふふふふふ  
毛品仙 夷良  
 風ふふふふふふふふふふふふ  
 春ふふふふふふふふふふふふ  
 冬道地を庵のふけや大松川  
 新の香ふふふふふふふふふ  
一 千月 和月 志月 千角



松竹の一はきしや 年の暮 雲明大社 冠李  
 卯酉のまのと改りや 板 長州通浦 放塵  
 閑者の新しきは 吟 如 研  
 ありやや危り 縁と歌の私 北笋  
 年一し月といつ 是り月と歌 徳 水  
 破りし目と 此や 似 猿  
 葉屋の板より 南 園  
 一すち人とは 大坂 茅里  
 は 普 門  
 年一 玄

久通

青く照り風と柳のあまらば

半時庵

口状

しをん

風雜のあふ大和 世にこそ あまらば  
 昼夜をきし 物屋とあ あまらば  
 是り思とあり 此 あまらば  
 似 あまらば  
 店位 あまらば

坊りたりや又とて百十  
厨とハ世とてしう人  
り後二巻三巻を  
原もる者も  
縁もる者  
てて即直  
しう  
海を飽  
こや  
ぬ入

代の  
入  
さ  
物  
移  
能

え録

下  
遺

そらぬと並つて他倍とちかくなぬは  
角つのもよひの柳子つのもよひと  
金銀の物よあてより品物の庸人  
をさしうはるをさるの形より物  
といふあふふしと

寛保三癸亥十月十二日

伯望 沾耳謹書

